

論文

## 幼児の表現遊びにおける領域「表現」のねらい及び保育者の役割に関する 学生の気づき—地域子育て支援活動「あそぼーや」を通して—

Analysis of retrospective reports written by university students in the kindergarten teacher training course on expressive play in young children

宮本 隆信 (高知大学教育学部)

MIYAMOTO Takanobu

*Faculty of Education, Kochi University*

### ABSTRACT

The purpose of this study was to examine how university students in the kindergarten teacher training course on expressive play in young children consider the aim of early childhood education in the practice of local child-care support activity “asoboya.” As a result of analyzing the report of eight survey collaborators, it was found that they were working in consideration of the purpose of early childhood education. From the results of this research, it was shown that for students who are aiming to become a kindergarten teacher, local child-care support activities are a place to learn many things about early childhood education.

## 1. 問題

平成 29 年 3 月に改訂された幼稚園教育要領

幼稚園教育要領は、概ね 10 年に一度の改訂が行われている。平成 29 年 3 月に改訂された幼稚園教育要領では、環境を通して行う幼児期の教育において、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開される必要性と、そのためには保育者による教材や環境構成の工夫がなくてはならないことが示されている。

また、幼児期に育みたい資質・能力の 3 つの柱として、遊びや生活の中で豊かな体験を通じて、何を感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになるのかといった「知識及び技能の基礎」、遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするかといった「思考力、判断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むかといった「学びに向かう力、人間性等」が示され、これら 3 つの柱は分かっているのではなく一体的に育んでいくことが重要とされている。

そして、これらの資質・能力は、幼稚園教育要領における 5 領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）の枠組みとともに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」という枠組みも踏まえながら育むこととされている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の 10 の姿である。これらは 5 領域の内容を踏まえたものであり、幼児期の終わり、つまり 5 歳児後半に身に付けることが望ましい具体的な姿を整理しているが、3、4 歳児においても、それらを念頭におきながら指導することが望まれるものである。

加えて、幼稚園における教育課程が「社会に開かれた教育課程」としての役割を果たしていくための、いわゆる預かり保育の計画、実施の必要性や、幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取り組みを進め、地域における幼児期の教育センターとしての役割を果たすよう努めることなど、保護者支援の重要性についても明示されている。

領域「表現」

平成 29 年 3 月に改訂された幼稚園教育要領における領域「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」領域である。そして、ねらいについては (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ、(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ、(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ、の 3 つが定められている。そして、このようなねらいを達成するために指導する事項である「内容」が 8 項目、教師が指導する際の留意点である「内容の取扱い」が 3 項目設定されている。今回の改訂においては、領域「表現」の

「ねらい」は変わっていない。「内容」については、(1)「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」が「生活の中で様々な音、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」と変わっている。「内容の取扱い」については、(1)の「自然などの身近な環境」が「身近な環境」に変わり、改訂版では「その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」が追記された。そして、内容の取扱い (3) に「様々な素材や表現の仕方に親しんだり」が追記されている。

特に、「内容の取扱い」における表記の変化は、幼稚園教育要領第 1 章総則第 1「幼稚園教育の基本」において、「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、」という、今回の改訂で追記された内容と関連している。「幼児教育における『見方・考え方』は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら試行錯誤したり、思い巡らしたりすること」(中央教育審議会, 2016)であり、教師は、幼児の主体的な活動を促し、遊びを通しての指導を中心に幼児一人一人の特性に応じた指導が求められるのである。

高知大学教育学部幼児教育コースによる地域子育て支援活動「あそぼーや」

高知大学では、2015 年 4 月に教育学部幼児教育コースが開設され、同年 5 月に地域子育て支援活動「あそぼーや」の活動が始まった。「あそぼーや」は、大学近郊に住む未就学児と保護者が来学し、教育学部教員の指導のもとで幼児教育コースの 1 年生が主体となり企画、実施した遊びを楽しんでもらうという活動である。年間 10 回 (1 学期、2 学期に各 5 回) 開催されている。本研究においてとりあげる 2018 年度 1 学期の「あそぼーや」の実施日と主な活動は表 1 に示すとおりである。

2018 年度の幼児教育コース 1 年生は 8 名であり、1 学期初めに、「あそぼーや」の各回の担当者が決められた。担当となった学生は活動指導案を作成し、学生全員で話し合いながら活動での役割を決め、準備を行う。「あそぼーや」では、駐車場への誘導、受付、遊びの司会、進行、保護者への注意事項の連絡、片付けなどはすべて学生が行う。「あそぼーや」は、近隣地域の未就学児とその保護者の子育て支援を行う場であるとともに、保育者を目指す学生が子育て支援とは何であるかを実践的に学ぶ場でもあり、また、幼児期にふさわしい生活が展開されるためには、幼児教育における 5 領域や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」といった枠組みを参照しながらどのように環境を構成すればよいのかについて学ぶ場でもある。このことから、「あそぼーや」の実践後には振り返りの時間をもち、振り返りレポートをもとにグループデ

表1 「あそぼーや」の主な活動

	実施日	主な活動
第1回	2018年5月25日（金）	いろいろな素材を使って、切ったり貼ったり楽しもう！
第2回	2018年6月8日（金）	たくさんの粘土で遊ぼう！
第3回	2018年6月22日（金）	広い体育館で思いきり遊ぼう！
第4回	2018年7月6日（金）	七夕のお話を楽しもう！
第5回	2018年7月27日（金）	歌とリズムで楽しもう！

イスカッションを行い、全体で成果と課題を共有し、次の計画につなぐ取り組みを行っている。

「あそぼーや」活動後、学生は振り返りレポートを作成する。振り返りレポートは、「全体目標」、「個人の目標」、「『あそぼーや』で学んだこと、感じたこと、気づいたこと」の3つの記入欄から構成されている。「全体目標」と「個人目標」は、5段階で自己評価を行うものであり、『あそぼーや』で学んだこと、感じたこと、気づいたこと」は自由に記述するものである。振り返りレポートは、教員と学生全員でリフレクションを行う日の前日の午後5時までに、幼児教育コースの共有アドレスへメールに添付して送ることとされている。

2018年度1学期「あそぼーや」のリフレクションは各回の「あそぼーや」の実施日の次の週の月曜日1限目に行われた。リフレクションでは、まず各学生が前日にデータとして提出したレポートをプリントアウトしたものが教員から各学生に配布され、学生はそのレポートを手元を持ちながらグループで話し合いを行う。なお、話し合いの前に、学生には「リフレクションのまとめ」の記録用紙が配布される。記録する内容は、「本日のリフレクションで新たに気づいたこと」「次回の『あそぼーや』での各自の目標」である。

「あそぼーや」担当グループのリーダーの司会によるディスカッションを行った後、次回の「あそぼーや」での各自の目標を手元の「リフレクションのまとめ」用紙に記入し、教員が一旦回収してコピーをとり、すぐに学生に返却する。学生は自分が立てた「次回の「あそぼーや」での目標」を、次回の「あそぼーや」実施後の振り返りレポートに記入して達成度も書き入れる、という流れになっている。

このように、学生は、計画、準備、実践、振り返り、次の計画、という循環性をもった学びの場として地域子育て支援活動「あそぼーや」での実践を重ねている。

### 本研究の目的

本研究では、領域「表現」に焦点をあて、「身体遊び」をテーマとして実施した地域子育て支援活動「あそぼーや」における学生の実践が、幼児の表現遊びにおける領域「表現」のねらい及び保育者の役割に関する学生の気づきにつながっているかについて、学生による振り返りレポートをもとに検討する。

## 2. 方法

1) 調査協力者：大学生8名（男2名、女6名）

## 2) 活動の流れ

### ①活動指導案の作成

全体の目標は、「自分の体を十分に動かし、様々な動きをしよう」とすることで身体の諸感覚を豊かにする」「明るくのびのびと運動し、充実感を味わう」である。資料1に指導案を示す。アスレチックエリアでは、マットの上に丸太が置かれており、その下にはワニやカバの紙人形がある。子どもたちはジャングルの中で丸太を渡るイメージをもち、沼に落ちないようにバランスをとりながら丸太を渡るのである。魚釣りエリアでは、ビニールプールに段ボールでできた魚が入っており、磁石がついた竿で魚を釣り上げる。海で大きな魚を釣り上げるイメージをもち、慎重にねらいを定めて竿を操作する。パズルエリアでは、段ボールでできた大型のパズルがあり、組み合わせると動物の絵になる。子どもたちは完成する動物の姿をイメージしながら、大きな段ボールをかかえて絵のパーツを動かしていく。迷路エリアでは、新聞紙で通路がつくられており、その途中に動物が隠れている。子どもたちは、森で動物を探すイメージをもって、迷路を進んだり戻ったりしながら、移動を楽しむ。

### ②活動のリハーサル

「あそぼーや」実施日の4日前と実施当日の活動開始直前にリハーサルが行われた。

### ③「あそぼーや」実践

### ④振り返りレポート作成

「あそぼーや」実践後、学生は各自、「全体目標」、「個人の目標」、「『あそぼーや』で学んだこと、感じたこと、気づいたこと」の3つの記入欄から成る振り返りレポートを作成する。

### ⑤振り返りレポートをもとにしたリフレクション

「あそぼーや」活動日の次の週の月曜日1限目に、学生と教員による活動の振り返りを行い、「リフレクションのまとめ」と「新たに気づいたこと」を簡潔にまとめて教員に提出する。

## 3) 分析方法

学生による合計8件のレポートをデータとして、「あそぼーや」の実践活動によって学生においてどのような振り返りの観点がみられるのかを把握するために、計量テキスト分析の手法を採用し、KH Coder (Ver. 3. Alpha. 8) を用いた。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析 (content analysis) を行う手法である」とされている (樋口, 2014)。本研究では、学生による振り返りレポートの特

徴を把握するため、頻出語の抽出、共起ネットワークの作成のみを行った。出現回数が2回以上の頻出語を表2に示す。図1は、最小出現数5回以上の語の文単位の共起ネットワークを示したものであり、図2は、最小出現数3回以上の語の文単位の共起ネットワークを示したものである。Jaccard係数は、おおよそ0.1以上で弱い特徴がある、0.2以上で特徴がある、0.3以上で強い特徴があるとされている(池田・川島・中島, 2017)。図1、2では、出現数が多いほど円が大きく、強い共起関係ほど円をつなぐ線が太い。

4) 倫理的配慮

調査協力者に対して、データは研究目的のみに使用し、それ以外の目的で使用することは決してないこと、分析結果の公表時においてプライバシーは保護されること、また、研究協力に関して承諾しない場合であっても、それによって何ら不利益を被ることはないことを説明し、文書によって協力の承諾を得た。

3. 結果と考察

幼稚園教育要領における領域「表現」において、具体的な内容は、音楽、造形、身体表現の3つに分かれている(無藤 2011)。このうち、身体表現に関わる部分を取り出すと、「ねらい」においては、「(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」「内容」においては、「(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする」「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」、「内容の取扱い」においては、「(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にしながら自己表現を楽しめるように工夫すること。」がある。

表2は、出現回数が2回以上の頻出語を示したものである。表2においてみられる「感じる」「遊ぶ」「楽しむ」は、領域「表現」の「ねらい」及び「内容」にもみられる語であり、「あそぼーや」の実践の振り返りにおいて、幼児教育におけるねらいに配慮できていることが示唆される。資料1に、学生による振り返りレポートの抜粋を示す。

また、図1及び図2においてみられる「予想—対応」のつながりは、「子どもの行動が予想と反してしまった場合の対応の仕方を、学生同士でしっかりと共有する必要があった」などの記述があったことによるものであり、図1においてみられる「安全—課題」のつながりは、「安全面への配慮が万全とまでいかなかったことが課題として挙げられる」などの記述があったことによるものである。子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにするうえで、子どもの行動を予想し、いかなる行動がみられたとしてもそれに対応すること、そして、子どもの安全に常に配慮

表2 レポート頻出語 (出現回数2回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	78	他	5	少し	3
迷路	23	注意	5	上	3
考える	20	入り口	5	場面	3
子	19	必要	5	新聞紙	3
あそぼーや	17	遊び	5	前回	3
今回	16	3つ	4	全員	3
安全	15	シール	4	足跡	3
ジャンプ	14	トイレ	4	体	3
走る	12	以降	4	体育館	3
予想	12	滑る	4	大学生	3
感じる	11	危ない	4	挑戦	3
見る	11	気	4	通り抜ける	3
入る	11	魚	4	諦める	3
アスレチック	10	共有	4	貼る	3
手遊び	10	工夫	4	転がる	3
遊ぶ	10	降りる	4	難しい	3
課題	9	最初	4	配置	3
山	9	次回	4	反す	3
思う	9	手	4	反対	3
対応	9	小さい	4	平均	3
マット	8	場合	4	歩く	3
ルール	7	人数	4	目線	3
少ない	7	跳び箱	4	立体	3
前	7	途中	4	流れ	3
来る	7	動き	4	1つ	2
活動	6	道	4	2つ	2
見本	6	特に	4	4つ	2
行動	6	聞く	4	すべて	2
高い	6	保護	4	すべり台	2
自分	6	方向	4	たくさん	2
十分	6	誘導	4	ひとつ	2
出る	6	コミュニケーション	3	カバ	2
人	6	パズル	3	ミッション	2
声	6	ワニ	3	悪い	2
設定	6	確保	3	一緒	2
説明	6	覚える	3	一番	2
担当	6	危険	3	引っ張る	2
動物	6	魚釣り	3	隠す	2
同士	6	見せる	3	可能	2
良い	6	言う	3	回	2
ほか	5	行く	3	回る	2
怪我	5	最後	3	改善	2
学生	5	仕方	3	確認	2
楽しむ	5	止める	3	簡単	2
完成	5	時間	3	気持ち	2
逆	5	周り	3	挙げる	2
見つける	5	集まる	3	教える	2
使う	5	集める	3	近く	2
状況	5	出口	3	決める	2
進む	5	出来る	3	結局	2

し遊具や用具を整えることは、保育者の重要な役割といえる。学生たちは実践活動後において、保育者の役割という視点からの振り返りができていることが示唆された。

本研究の結果から、地域子育て支援活動「あそぼーや」が保育者をめざす学生にとって幼児教育のねらい及び保育者の役割を学ぶ場となっていることが示された。

本研究は、地域子育て支援活動が、保育者をめざす学生にとって幼児教育のねらい及び保育者の役割を学ぶ場となっているかを、幼児教育における5領域という観点から検証を試みる研究の一環として位置づけられるものである。今後は、幼児教育における他の領域の学びの観点からも学生の実践活動を検証していきたい。

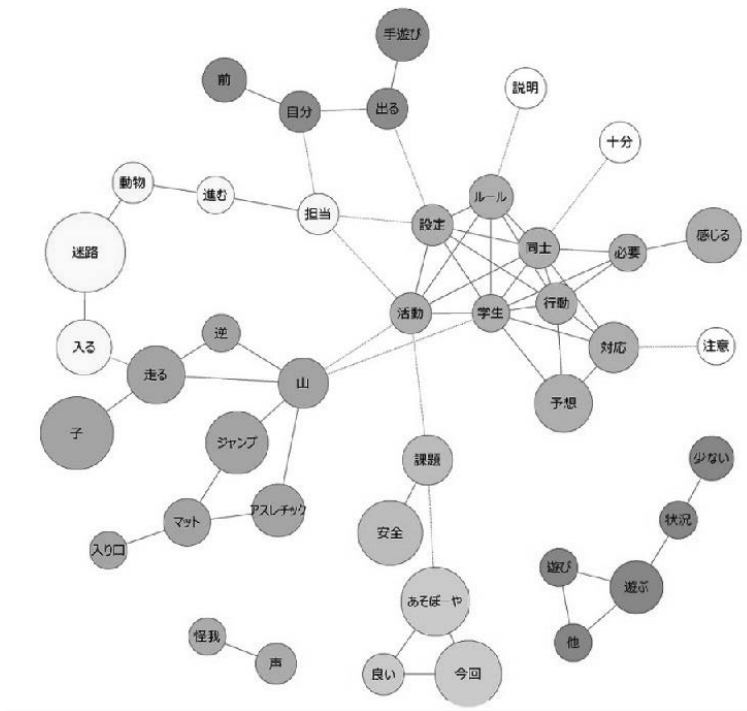


図1 共起ネットワーク (最小出現数5)

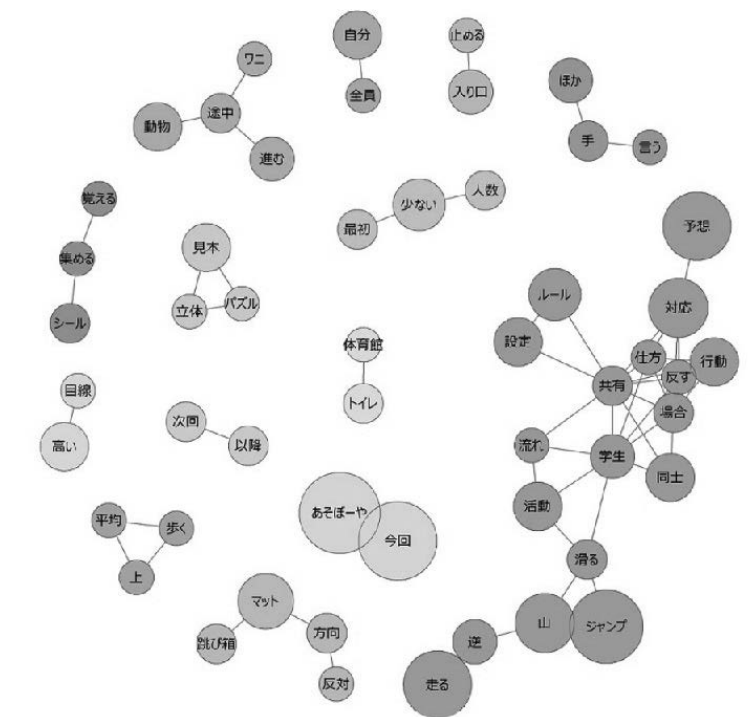


図2 共起ネットワーク (最小出現数3)

#### 4. 引用文献

樋口耕一(2014). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』 ナカニシヤ出版

池田史子・川島啓二・中島玲子(2017). 高大接続ワークショップが高等学校教員・大学教職員・大学生にもたらしたこと—計量テキスト分析を用いて— 山口県立大学学術情報, 10, 47-

59.

無藤隆(2011) 『保育の学校②5 領域編』 フレーベル館  
文部科学省中央教育審議会答申 (平成 28 年 12 月 21 日)

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2020 年 7 月 22 日確認)

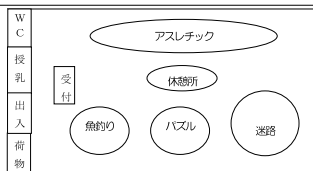
資料1 「あそぼーや」指導案

地域子育て支援広場「あそぼーや」(第 3 回)指導案 2018年6月

記録者:

全体の目標(達成するための具体的方策)  
 ※準備をすすめながら学生全員で話し合い、担当者が配入すること  
 自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとして身体の感覚を豊かにする  
 明るくのびのびと運動し、充実感を味わう

(テーマ) 森に行っておぼろ!  
 (日時) 6月22日  
 (担当) 進行:  
 受付:  
 案内:(正門) (駐車場)  
 待機:



時間	子どもの動き	学生の動き	環境構成・備考
13:00		<ul style="list-style-type: none"> <li>●学生集合</li> <li>●着替えて準備開始</li> <li>●荷物を体育館に運ぶ</li> <li>●終わりのあいさつのりハーサル</li> </ul>	<b>体育館</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>●迷路:</li> <li>●アスレチック:</li> <li>●魚釣りの:</li> <li>●立体パスル:</li> <li>●休憩所:</li> </ul>
14:20		<ul style="list-style-type: none"> <li>●それぞれの担当場所につく</li> </ul>	<b>トイレ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>●体育館のトイレを使用</li> <li>●床の掃除</li> <li>●スリッパと台の準備</li> <li>●トイレの案内表示</li> </ul>
14:30	●受付をしてから遊び始める	<ul style="list-style-type: none"> <li>●受付開始</li> <li>●受付係は出欠を取り、名札を配布する</li> <li>●待機係は保護者に荷物置き場を伝え、子どもと</li> </ul>	<b>授乳室</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>●女子更衣室の掃除</li> <li>●移動させたものの整理</li> <li>●授乳室の案内表示</li> <li>●男子更衣室前の長いす(おむつ替え台)、ハイア椅子(2階のフロアから)移動</li> </ul>

時間	子どもの動き	学生の動き	環境構成・備考
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●アスレチック</li> <li>●順番を守らない</li> <li>●危険な行為をする</li> <li>●やり方がわからない</li> <li>●トンネルであばれだす</li> <li>●平均台で走り出す</li> <li>●フープの中を通らない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●注意を促す</li> <li>●学生が見本を見せる</li> <li>●出口へ促す。または他のお友達も使うから壊さないでと伝える</li> <li>●危ないから走らないでと伝える</li> <li>●道を示してあげる</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●魚釣り</li> <li>●うまく釣れない</li> <li>●釣り竿が絡まる</li> <li>●プールの中に入って魚をつかもうとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●釣しやすいように魚の向きを調整する</li> <li>●子ども同士の間隔をあける</li> <li>●踏んだら危ないから入らないでと伝える</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●立体パスル</li> <li>●ピースを取り合う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●順番にするように声をかける</li> </ul>	

時間	子どもの動き	学生の動き	環境構成・備考
16:00		<ul style="list-style-type: none"> <li>●あいさつ</li> <li>●解散</li> <li>●アンケートの配布:</li> <li>●アンケート、名札の回収:</li> <li>●次回の予約、駐車場無料券の配布:</li> <li>●見送り:</li> <li>●その他の人で片付け</li> </ul>	

資料2 学生による振り返りレポートの抜粋(『あそぼーや』で学んだこと、感じたこと、気づいたこと)

(1) 学生A

- 学生同士のルール設定の共有が中途半端だったため、子どもたちが予想と反した行動をとった場合の対応の仕方が十分に統一できなかった。
- 「山からジャンプ」の活動では、私たち学生は、まず踏み台代わりにした跳び箱に上がってからすべり台を滑るだろうと予想していたのだが、実際はその流れだけではなく、すべり台を逆走したり、寝転んだ状態で滑る子どもなどが見られた。また「丸太を渡ろう」では、子どもにどこまで渡り切れればいいのかということを示していなかったため、途中で降りてしまい、マットの上にワニやカバといった動物がいるという環境設定だったにもかかわらず、その意味をあまりなしていなかった。魚釣りでも同様に、魚は何匹まででも釣ってよい

が、持ち帰ってもよい魚は三匹までという半端なルール設定にしてしまっていたため、結局何匹も持って帰ろうとする子どもが出てきてしまい、最後の方には魚はほとんど残っていなかった。

- ・子どもの行動が予想と反してしまった場合の対応の仕方を、学生同士の間でしっかりと共有する必要があった。
- ・子どもの安全を確保したうえならば活動を続けさせてもよいのか、それとも「危ないから座って滑ろうね」と軽く注意を促すべきだったのか、学生同士の連携が不十分だったために対応の差が生まれてしまっていた。
- ・ルールを設定したとしても、各担当内だけでの共有に留まってしまえば、子どもが予想と反した行動をとった場合に、対応の仕方に迷ったり、流れ通りに活動が進まなかったりする可能性につながる。

#### (2) 学生B

- ・「迷路」の良かった点は、ただ入り口から出口に進む迷路ではなく、道の途中に動物を隠してそれを見つけるというミッションを課したことである。この仕掛けにより、子どもたちは道順を通常の迷路より頭で考えたり、全種類を見つけるまで何回も挑戦する気持ちができたりした。
- ・大学生が小さい子どもにルールの説明をし、挑戦しようとするのを見ていた年長さんが、「私が教えてあげる！」や「私が一緒に行ってあげる！」と、率先して小さい子どものお世話を申し出てくれた。これは、この活動があったからこそ生まれた子ども同士の関わりだと言える。
- ・子どもの目線になり何回も試行錯誤した迷路の広さや高さ、道順なども良かった。子どもたちの目線の高さでは行き止まりや動物は見えず進むワクワク感があるが、保護者や大学生の目線の高さではしっかり子どもたちの姿を確認することができて安全面を確保できたり、迷路を進んでいる途中で話しかけることができコミュニケーションを取ることができた。
- ・良くなかった点は、他の遊びで気持ちが高ぶったまま迷路に走りながら入ってくる子がいたことである。ルール説明で「迷路の中では走らない」という旨のことを伝える予定だったが説明を聞かずにそのまま走って入ってしまった。すぐに声がけをすると走るのを止めてくれたが、もし入り口付近に他の子がいたとすると怪我につながったかもしれない。大学生が入り口付近でより注意を払い、入る前に対応できるようにするべきであった。
- ・一番外側の新聞紙を通り抜けたとき、すぐ目の前に得点板があり当たりそうで危険であった。設置の際に、確認をしたつもりではあったが、思いもよらないところから通り抜けをしてきたので対応しきれなかった。抜けられないようにテープで止めておく必要があった。
- ・安全面では、事前に予想できる危険箇所を考え工夫したが補いきれていなかった。子どもたちの名前は前回より覚えることができたが、まだ覚えきれてはいない。

#### (3) 学生C

- ・子どもが1人になるようなことがないように、誰か1人は付いていた点がよかった。特にアスレチックでは、子どもだけになったときには8人のうちの誰かがついてみていたため、誰も怪我をすることがなく過ごすことができた。
- ・子どもたちが全力でからだを使って楽しんでくれていた点がよかった。山からジャンプについては、私たちは、子どもたちが滑り台のように滑って降りると予想していたが、子どもたちはごろごろと寝て体を回して山を転がって降りていた。そのあとの子どもたちもこの方法で転がっていた。この発想はなかった。寝て転がる方が、全身の筋肉をこがせることができると気づいた。
- ・手遊びで、ペープサートを使ったことや、動物が順番に出てきたことで、わかりやすく、子どもたちがやりやすいようにした点がよかった。こうすることで、1回目から多くの子どもたちが真似をすることができた。
- ・山からジャンプで、山を逆走する子どもがいて、上から降りてくる子どもとぶつかりそうになって危なかった。ルールをちゃんと決めておくべきであった。
- ・子どもたちがひとつのところに集まった点はよくなかった。特に最初に来た子どもたちには釣りが人気で、他のところに子どもが少なかった。子どもがばらけるように声かけをするべきであった。
- ・手洗いの場所を間違える人がいた。お手洗いの近くだけでなく、体育館に入ったすぐのところにも案内の紙を貼っておくべきであった。
- ・蜘蛛の飾りをとる子どもがいるということに気づけなかった点である。お気に入りであったためなかなか返してもらえなかった。目につくが届きにくい場所に貼るべきであった。

#### (4) 学生D

- ・安全面への配慮が万全とまでいかなかったことが課題として挙げられる。安全用のマットやアスレチックの配置など十分に注意したつもりだったがとところどころ注意の行き届いていないところがあった。例えば、アスレチックで山からジャンプで設置した跳び箱の横にマ



ットがなくてそこから落ちると危険な状況になっていた。それに気付かず、しばらくすると親御さんからの指摘を受けて、それからはずっと子どもにつきっきり状態で人数が少ない状況には厳しいものがあった。

- ・平均台の上を歩いてほしくて置いたカバやワニに気を取られてなかなか平均台の上を歩いてもらえなかった。これは子どもがばらばらに来た時に説明ができなかったことが原因として考えられる。しかし、説明しようにも人数の関係で説明に人員を割くとほかに手が回らず結局同じようなことになってしまう。人をどこに使うかもこれからのあそびをやっていく上での課題になってくる。
- ・手遊びやあいさつの途中でワニで遊びだした子どもがいた。
- ・前回に引き続き子どもたちとのコミュニケーションは十分に取れていた。その他には、子どもたちについてそれぞれが持ち場を離れても子どもを見ることができていた。そして手遊びでも導入から子どもとのコミュニケーションまで上手にこなせていたと感じた。

#### (5) 学生E

- ・準備がよくできていたと思う。授業の空きなどを使って全員で協力したのでとても完成度の高いものができていたと感じる。特に迷路とアスレチックの見た目、魚のイラスト、立体パズルなどが子供は楽しんでくれたし保護者の方からの評価も高かった。
- ・前回までの手遊びは自分たちが前に出て手遊びをし、それを見て楽しんでもらうという形だったが、今回は手遊びの時間が多めにとれたおかげで手遊びが二回でき、一回目に自分たちがして二回目は子供たちも交えてして、全員で楽しむことができた。
- ・子供が一人になる場面が少なかったと感じた。今回は人数設定がギリギリであり会場も広かったため見きれない子供が出てくる思っていたが、生徒全員が気を付けて見ていたのと自分の担当場所に縛られずいろんなところへ行っていたおかげで子供が一人で遊んでいるという状況が少なかった。
- ・予想外の出来事にうまく対応できなかった。一番初めに来た子たちがすべて魚釣りに来るという予想外のことが起こり、同時に八人くらの相手をしなくてはならなくなりほかの人の手も借りたが話を聞いてくれなかったりとても苦労した。
- ・今回のあそびではこちらが用意した遊びをいろいろな方法で遊んでくれる子がいた。アスレチックでは蜘蛛の巣や平均台で様々な遊びを見せてくれた。子どもは柔軟に発想を広げて遊んでいた。

#### (6) 学生F

- ・迷路は、思った以上に多くの子どもが来てくれた。普通に迷路をするだけでは1回入ると道を覚えてしまって2回目以降は面白くなくなってしまうかもしれないが、動物を探してシールを集めるようにしたことで、何回も挑戦してシールをたくさん集める子供が多くいたので、そのようにしてよかったと感じた。
- ・迷路は大きい子どもしか入らないだろうと思っていたが、実際は小さい子どもも入ってきた。まだどこが道かはわかっていないようだったが、新聞紙の隙間などをくぐったりするのが、楽しいようだった。
- ・安全面では、二回目以降で慣れてきた子供などが走って入ってしまうこともあり、少し危なかったが、ほとんどの子どもが歩いてくれた。また、引っ張る子どももいたが、新聞紙を全部は貼っていなかったことで、引っ張ってもほかのところが壊れてしまうことがなく、また私たちがどこからでも入れたので、中で何かあってもすぐに対応することができ、よかった。高さも、子どもたちは向こう側のぞけず、大人は外から中を見ることが出来たのでちょうどよかった。
- ・保護者の方が何人か迷路を褒めてくださってうれしかった。残り時間が少なくなってきたときは最初に予定していた通りに近くにいた子供に他に遊んでいないところがないか聞くことが出来た。
- ・全体的に子供たちは体をたくさん動かして遊んでくれていたようだった。

#### (7) 学生G

- ・子どもたちに飽きがこないよう配置や細部を工夫できた点よかった。受付をしていると、迷路に行き終わったある2人の女の子が迷路で集めたシールを見せてくれた。見ると、1人の子がねずみが見つけれられていなかったので「Aちゃんはねずみさんの青のシールあるけど、Bちゃんはねずみさんどこかわかんなかったかな」と声をかけるとねずみを見つけていた女の子が「ねずみどこにおるか分かって！教えちゃお。」と言ってまだ見つけれられていない子の手を引いて再び迷路に走って入っていった。迷路に動物を隠したのは、1回だけでなく何回も迷路を楽しんでほしいというねらいからであったので、この場面からそのねらいがしっかり達成されているといえるだろう。
- ・アスレチックの中の『足跡をたどろう』で遊んでいる子が「これクマの足。これはひよこ」と何の足跡か当てながらたどっていたので、ただの輪っかではなく足跡にするという工夫もよかったと思う。
- ・改善すべき点は子どもの予想外の動きへの対応が少し遅れてしまったことである。アスレチックの中の『山からジャンプ』では、自分たちは入り口側からマットが敷いてある方向へ向かってジャンプするように考えていた。しかし、子どもたちの中には1回マットに向か

ってジャンプをした後、もう1回ジャンプしたくなって反対方向にジャンプをする子がいた。跳び箱の入り口側にはマットがなく、着地の時のときに危ないのでしっかり止めなければならなかったと思う。

・跳び箱からマットの方向にジャンプしようとしている子がいたが、反対側から別の子が走ってきて、ジャンプした子と走ってきた子がぶつかりそうになっていた。ジャンプをしようとしている子に注意しすぎて、周りの状況に気を配っていなかった。周りに人がいなくて安全が確保できてからジャンプの誘導をすべきだった。

(8) 学生H

・立体パズルの見本をつくっていた点がよかった。あそぼ一やが始まる前は年長さんくらいの子どもたちは見本がなくても自分たちで考えながらできると予想していた。そのため最初は見本を見せないでやってもらい、分からない子がいたら見本をみせてつくってもらおうと考えた。しかし、実際にやってもらおうと4人くらいできつねをつくろうとしていたが、思ったよりも苦戦していた。初めは意気揚々と「きつねつくる！」と言っていた子も、元気がなくなっているように感じた。そして完成する前に諦めてしまい他のところへ移動しようとしていた。私はせっかくな立体パズルに興味を持ってくれたので最後まで完成させてその喜びを味わってほしいと感じ、見本をみせてつくってもらうことにした。すると、いったんは諦めた子どもたちがもう一度作りはじめた。見本を見てもわかりにくいところ「これはきつねさんの手かな？」などと、間違ったときは「これはほんとにここであっているかな？」などの声掛けをして子どもたちに考えてもらいながら一緒につくった。そして完成したとき子どもたちの笑顔が見られた。このことから子どもたちは簡単すぎても飽きてしまうし、難しすぎても諦めてしまうため難しいことから徐々に簡単にして子どもたちが最終的にできるような工夫をすることが大切だと感じた。

・アスレチックや迷路を行う前の約束事を子どもたちに十分に伝えていなかった点はよくなかった。アスレチックでは山を逆走している子がいた。その子に「これはそっちから登ったらお友達とぶつかって危ないからこっちから登ってね。」という素直に聞いてくれた。また迷路では、出口から出てきたのにまた出口から入っていく子がいた。どちらの場面でも今回は怪我をした子はいなかったが、子ども同士でぶつかって怪我をする可能性は十分にあった。このような状況を防ぐために、子どもたちが遊ぶ前に安全に遊ぶための約束事を決めて子どもたちと約束してから遊んでもらえば今回のようにはならなかったのではないかと思った。

---